

---

# 世界の片隅で～僕が見ていたものは

夏実 歓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界の片隅で〜僕が見ていたものは

### 【Nコード】

N6162F

### 【作者名】

夏実 歓

### 【あらすじ】

夕陽に染まった部屋で僕は電子炊飯器に命があることを判然と悟る。その後、壁の怪しい染みのマイクとの対話を通じて僕の得たものは……

## 1 (前書き)

ほとんど短編になる予定です

真っ赤な夕陽が部屋を赤く染めていく。まるで、熟れきった柿みたいな色でバカに綺麗だナアと思った。

僕は素っ裸だった。

何だって素っ裸でこんなことを考えているのだろうか？

簡単な話だ。だって、僕は悩んでいるから。

悲しいかな、今の僕にはこうやって素っ裸でいるぐらいしか、この腹のそこから湧き上がる感覚に抗うすべは無い。

どうも狂ってしまったのかもしれない。

全ては二日前に遡る。その時の僕は今と同じように夕陽に染まっていた部屋で、夕飯前の漠然とした時間を過していた。その時は、まだ夕陽の色の美しさも感じずに・・・

突如として、僕は判然と悟ったのだった。或いは宇宙の意思だったのかもしれない。僕は電気炊飯器が一個の知性を持った生き物であることを知ったのだった。

僕は読んでいた雑誌を放り投げて、あまりの感動に叫びだしたかった。

でも、叫ぶとこの狭いアパートでは近所迷惑になるので辞めた。

## 1（後書き）

すぐく久しぶりに投稿しました。

シユールなものに仮託してちよつと近況を整理しないと生きていくこともままならない気分なのでとりあえずリハビリがてら書きますので懲りずに読んでみてください。

止まっている話も少しずつ進めていく予定です。  
そちらもよろしく。

そう考えた僕は部屋の壁の染みに向かって語りかけた。僕は神にでもなったかのように語った。染みよ！聴きなさいと・・・

ちなみにこの染みと言うのは、ミッキーマウスを尖らせた様な染みで何回消しても必ずぼんやりと浮かび上がってくる怪しい染みだ。こいつのおかげで、僕は何人かの友人を失う羽目になったくらいだから、きつと何かあるのだろう。僕自身はたまに人の視線を感じるくらいでとくに迷惑はこうむっていないので気にしていないが。

そうして日がすっかり落ちたころ、まだ僕は延々と電子炊飯器について壁に語りかけていると、またもにわか信じられないことが起こった。染みが突然しゃべりだしたのだ。

それはそれは渋い声だった。

「そんなこといまさら言われてもなあ」

お前、しつこいねと続けながら、さも当然のように言った。

僕はまるで世界がひっくり返ったような思いだった。

だってそうだろう？僕が世界に先駆けて発見したと思った、電気炊飯器が生きているというこの世の心理はもう当然のことだったんだから・・・それこそ、壁の中の染みでも知っているくらいの事だというんだから・・・

あまりの恥ずかしさに、死んでしまってもいいくらいの衝撃だった。すっかりしよげ返っていた僕に向かって染みは告げた。あの渋い声で・・・

「まあ、そう落ち込むな、本当のことを知るのに遅いっていうことは無いじゃないか」

まったくその通りだった。僕はこの怪しい隣人の言葉ですっかり目からうろこが落ちたような気にさせられた。

新しいことを知るのに遅すぎるということも無い。孔子先生も、  
齡五十にして学ぶもまた大過なき、といっているではないか！

染みは続けていった。

「ともかく、俺はお前の世界が広がった事を心から祝福するよ・・・俺にはお前を抱き締めてやることもできないが・・・」

この壁の賢者、どこからともなく染み出す頼りがいにこの言葉は結構具合がよい、はその皮肉っぽいしゃべり方とがった外見には似合わず深い愛をたたえてこちらを見ていた（様に感じた）

「あなたの名前は何でしょうか？」

僕は思わずかしこまって訊いてしまった。

「好きに呼べばいい。名前なんてただのシンボルみたいなものだ。求めに応じてかわるものだから・・・」

と、いうので、彼をマイキーと呼ぶことに決めた。もちろん、ミツキーに似てるからマイキーだ。彼は頓着しないのだし、第一印象で、もう、それしか思いつかなかった・・・ゴメンよマイキー！

僕とマイキーは夜を徹して語り合った。マイキーはまさに博識にして聡明だった。皮肉るような調子も、だんだんと僕が気にならなくなっただのか、それとも彼が辞めたのか、まるで感じなくなった。

マイキーをたかが壁の染みだとさげすむことは何人にもできないことのように思われた。

そうたといえブツタだってイエスだってだ！

それどころか、マイキーが彼らと同じアパートに住んでいたって僕はちっとも不思議ではないと思うくらいだ。

「マイキー、君はいつたい何だってそんなに何でも知っているんだい？それになんて、壁の染みなんだい？」

赤くなつてしよくれた目を瞬かせつつ僕は尋ねた。

「それは若干長くなるな・・・また後にしよう。そう、一眠りした後だな・・・眠くなっちゃうような話さ！つまらない長い話・・・」  
マイキーは優しく言った。すでに窓の外には白んだ空が広がってい



た。

僕は軽くなずくとどっさりと倒れた・・・

気が付いたら、窓からは長くて赤い光が差し込んでいた。

マイキーは相変わらずの格好で、壁に張り付いていた。おどけたねずみの格好だ。

そこで、初めて僕は、今までのことが全部、夢だったんじゃないかと思ってみた。そう、夢だったんじゃないかと思ってみたんだ。

「よう、起きたね」

ゆっくりとマイキーの声が響いた。どうにも、その声さえ夢だと思ふことがきつとあの時の僕にはできたはずだが、僕はそうしなかった。

それは僕の中にいくつかの希望があったからだ。

そして、マイキーの話は本当に長かった。物語るというのは本当はこんな感じじゃないかと思ったほどだ。内容も素晴らしくわくわくするような、後、泣けたり恐怖におののいたりできるものだったとここに明言しておく。

ただ、本当にあまりにも長いし、僕が聴いたのも結構要約だったし、何より、あのマイキーの語りで泣ければこの感動は生まれないので、皆さんにもぜひマイキーの生の語りで始めてを体感してほしいから、内容についてはここで語らない。

すごく単純に言くと、マイキーは元々人間で、戦前の新興宗教の開祖様で、神に選ばれた男だったが、恋人との出会いや、組織の分裂、そして未来が見えたり見えなかったりの末、狂信的な信者に殺されて、本当の墓は別にあるのだけれど、その墓には死体は入ってなくてこのアパートのあった場所の屋敷の壁に塗りこめられたそうだけど、戦争中の空襲で、昔の建物は跡形もなくなって、誰もそのことを知る人がいなくなったとき魂の開放と共にこのアパートの壁の染みになったのだ！なんと美しい話だろう！！

とか、そんな感じだ。きつと、マイキーはアカシックレコードの端っこそこそりつながつているんだろぅなぁという僕の考えはおそらく間違っていないかっただろぅ。あと、電子炊飯器のことも、悲観することが無かったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6162f/>

---

世界の片隅で～僕が見ていたものは

2010年10月13日20時25分発行